

2006-07年度の年間カリキュラム報告

ーアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの中上級日本語集中教育ー

松本 隆

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターは、日本研究の専門家や日本関係の実務家などを目指す人々に、中上級レベルの日本語を集中的に指導する教育機関である。

当センターでは、40週間におよぶ年間コースと、6週間の夏期コースの、2種類の日本語プログラムを実施している。2006-07年度の年間コースの学生は49名、それに続く2007年6月から8月の夏期コース学生数は35名であった。本稿では前者40週間の「レギュラーコース」で実施した教育内容を報告する。

2 レギュラーコースの概観 (40-Week Intensive Program)

2006年9月4日から翌2007年6月8日までの40週間にわたってレギュラーコースを実施した。本コースは4つの学期からなり、9月開始から10月末の秋休みまでを第1学期、11月から12月の冬休みまでを第2学期、翌新年1月から3月の春休みまでを第3学期、そして春休み明け以降コース終了までを第4学期とし、1～2学期をまとめて前期と呼び、3～4学期を後期と呼んでいる（表1～4参照）。

授業は月曜日から金曜日まで、午前は50分間授業を2コマ（途中10分間休憩）、昼食をはさみ午後は90分間授業を1コマおこなった。ただし水曜日の午後はクラス授業を行わず、ゆとりをもたせた。

表 1 前期午前の内容

週	2006年 午前	月	火	水	木	金
1	9/4-9/8	入学オリエンテーション、写真撮影	筆記試験		所長面談	CALL・SKIP オリエンテーション
2	9/11-9/15	文法基礎 お試しクラス				
3	9/18-9/22	敬老の日				
4	9/25-9/29		文法復習			横浜の日 秋の校外学習
5	10/2-10/6		A S J or J G			
6	10/9-10/13	体育の日				
7	10/16-10/20	待遇表現				
8	10/23-10/27					
9	10/30-11/3	秋休み 10月28日(土)～11月5日(日)				
10	11/6-11/10	接続表現				
11	11/13-11/17					
12	11/20-11/24				勤労感謝の日	
13	11/27-12/1	統合日本語			統合日本語	
14	12/4-12/8	文章編 Integrated Japanese Advanced Course			会話編	
15	12/11-12/15					
16	12/18-12/22					個人面談4 前期評価
17	12/25-12/29	冬休み 12月23日(土)～1月14日(日)				
18	12/31-1/5					
19	1/8-1/12					

表2 前期午後の内容

週	2006年午後	月	火	水	木	金
1	9/4-9/8	発話試験	所長面談	所長面談	所長面談	個人面談1 入学祝賀会
2	9/11-9/15	漢字・発音 オリエンテーション	翌日午前からの 文法復習の説明	所長面談	防災訓練	個人面談2 診断的評価
3	9/18-9/22	敬老の日	(書道オリテ)			
4	9/25-9/29					横浜の日 秋の校外学習
5	10/2-10/6	総合運用Ⅰ		総合運用Ⅰ		
6	10/9-10/13	体育の日				
7	10/16-10/20					講演会 横浜開港
8	10/23-10/27					個人面談3 1学期評価
9	10/30-11/3	秋休み 10月28日(土)～11月5日(日)				
10	11/6-11/10					
11	11/13-11/17				講演会 小玉亮子	
12	11/20-11/24				勤労感謝の日	
13	11/27-12/1	総合運用Ⅱ		総合運用Ⅱ (3学期説明会)		
14	12/4-12/8					
15	12/11-12/15					忘年会
16	12/18-12/22					個人面談4 前期評価
17	12/25-12/29	冬休み 12月23日(土)～1月14日(日)				
18	12/31-1/5					
19	1/8-1/12					

表3 後期午前の内容

週	2007年 午前	月	火	水	木	金	
20	1/15 - 1/19						
21	1/22 - 1/26						
22	1/29 - 2/2				専門分野別 校外学習		
23	2/5 - 2/9	選択 A	統合日本語 II		選択 A	選択 B	
24	2/12 - 2/16	建国記念の日	Integrated Japanese Advanced Course II		文学 歴史 法律 美術史	スピーキング リーディング リスニング ビジネス日本語	
25	2/19 - 2/23				政治・経済 文化人類学		
26	2/26 - 3/2						
27	3/5 - 3/9			個人面談 5 3学期評価			
28	3/12 - 3/16	春休み 3/10(土)～3/25(日)					
29	3/19 - 3/23						
30	3/26 - 3/30					選択B	
31	4/2 - 4/6	選 択 A	上 級 日 本 語		選 択 A	東京の日 春の校外学習	
32	4/9 - 4/13					選択B スピーキング リーディング リスニング ライティング 現代小説	
33	4/16 - 4/20						
34	4/23 - 4/27						
35	4/30 - 5/4	休み：ゴールデンウィーク 4/28(土)～5/6(日)					
36	5/7 - 5/11	選 択 A	上 級 日 本 語		選 択 A	選 択 B	
37	5/14 - 5/18						
38	5/21 - 5/25						
39	5/28 - 6/1	筆記試験 am 発話試験 pm	発表準備：授業なし自主的に発表の準備を進める				
40	6/4 - 6/8		卒業発表会 クイーンズスクエア			個人面談 6 最終評価	

表4 後期午後の内容

週	2007年午後	月	火	水	木	金	
20	1/15 - 1/19						
21	1/22 - 1/26					講演会 久野明子	
22	1/29 - 2/2				専門分野別 校外学習		
23	2/5 - 2/9	総合運用Ⅲ			総合運用Ⅲ		
24	2/12 - 2/16	建国記念の日				現代史 大衆文化 ビジネス社会	
25	2/19 - 2/23						
26	2/26 - 3/2						
27	3/5 - 3/9	プロジェクト ワーク			プロジェクト ワーク		
28	3/12 - 3/16	春休み 3/10(土)～3/25(日)					
29	3/19 - 3/23						
30	3/26 - 3/30						
31	4/2 - 4/6					東京の日 春の校外学習	
32	4/9 - 4/13	プロジェクト ワーク			プロジェクト ワーク		
33	4/16 - 4/20						
34	4/23 - 4/27						
35	4/30 - 5/4	休み：ゴールデンウィーク 4/28(土)～5/6(日)					
36	5/7 - 5/11						
37	5/14 - 5/18	プロジェクト ワーク			プロジェクト ワーク		
38	5/21 - 5/25						
39	5/28 - 6/1	筆記試験 am 発話試験 pm	発表練習予備日 要予約		発表練習予備日 担当教員に事前予約し指導を受ける		
40	6/4 - 6/8	発表会場下見	卒業発表会 クイーンズスクエア			卒業式 パーティー	

午前と午後の授業の違いを端的にいうなら、午前は日本語の構造や知識に関する言語形式面を重視し、午後は聴読解や発話など言語運用の技能を伸ばす、という力点の置き方に差異がある。午前は「文法復習」「待遇表現」「接続表現」「統合日本語」「上級日本語」を必修科目とし、後期には「選択A」「選択B」という選択必修科目を「統合日本語Ⅱ」「上級日本語」と並行して実施した。午後は「総合運用」が1学期から3学期まで続き、4学期の午後は「プロジェクトワーク」を行った。

3 午前の必修科目 (Morning Session)

午前の必修科目では主として言語知識・言語項目に焦点をあてる。初級文法の復習や基本的な会話練習から開始し、待遇表現と接続表現を強固なものとしたのち、上級の日本語と呼ぶにふさわしい表現の拡充を図る。

3-1 文法復習 (Japanese Grammar Review)

入学直後の1学期午前にはまず、中級学習者にとって理解が難しく誤りやすい文法事項を取り上げ、知識を整理し正確さを高めながら運用力を向上させる。教科書として、当センター編集発行の市販教材 *An Introduction to Advanced Spoken Japanese* (略称A S J) あるいは当センターで作成した内部教材 *Japanese Grammar* (略称J G) のどちらか一方を、学生の日本語習熟度に応じて使い分けた。

また学生は予習に際して、印刷された教材だけではなく、当センター開発のコンピューターソフトウェアを利用し、文法項目のドリル練習と、会話の口慣らしにも励んだ。

2006-07年度は、1学期の第2週から第6週までテストも含めて合計22日間行った。

3-2 待遇表現 (Formal Expressions for Japanese Interaction)

この授業では、円滑な人間関係を構築できるよう、敬語とその随伴行動、社会慣習、礼儀、挨拶などを含めた言語行動を取り上げた。教材として当センターが作成した『待遇表現』（ジャパントイムズ社刊）を使い、それに準拠するソフトウェアを学生の予習用に提供した。

2006-07年度は、1学期の第7～8週に週5日の計10日間、および第4学期の「上級日本語」のうち4日間、合わせて14日間おこなった。

3-3 接続表現 (Conjunctive Expressions in Japanese)

接続詞に特に注目し、文と文の接続、段落や文章の組み立て方（複段落の作成）について指導した。使用教材は当センターが開発中の「接続表現」を用いた。

2006-07年度は、2学期の第10～11週の10日間をこの授業にあてた。なお学生の習熟程度に応じ、4学期の「上級日本語」の枠内で接続表現の補強をしたクラスがある。

3-4 統合日本語 (IJ: Integrated Japanese Advanced Course)

一般的な中級段階の日本語から、より高度で専門的な日本語への橋渡しをするために、独自開発教材『統合日本語 *Integrated Japanese Advanced Course*』を用いた。各課は同一の話題をめぐる「文章編」と「会話編」からなり、「文章編」では読解練習とそこで扱われる文型・語彙・表現を学び、「会話編」では自然な話し言葉を状況に応じて使い分けられるよう指導した。

2006-07年度は、2学期の第12週から第16週までの週5日計23日間で「統合日本語」上巻（第1～3課）を扱い、3学期の第20週から第27週の週2日計15日間で「統合日本語」下巻（第4課～5課前半）を扱った。月曜から金曜まで週5日間指導した2学期は、月火水を「文章編」に、木金を「会話編」にあて、書き言葉と話し言葉を別のクラス編成とした。その利点は、読むことは得意だが話すのは苦手なタイプの学生、あるいは逆

に流暢に話すわりには読みが弱い学生など、それぞれの日本語の性質に見合った対応が可能な点にある。しかし反面、書き言葉と話し言葉の統合的な学習という本来のねらいが不鮮明になり、特に話し言葉の扱いが軽んじられかねない、という問題点も浮かび上がった。

3-5 上級日本語 (AJ: Advanced Japanese)

2006-07 年度 4 学期授業期間 (第 30 ~ 38 週) の週 2 日火水を「上級日本語」と称し 16 日間をかけて日本語力の補強と拡充を目指した。標準的なクラスでは、3 学期の「統合日本語」下巻の残り部分 (5 課後半つまり会話編) を終え、1 学期に扱った「待遇表現」の補足と整理を行ったのち、「対談・インタビュー」「評論」「論説」などの読み物素材へと進んだ。

これらの読み物は、それまで学生にとって馴染みの薄い素材も多く、より幅広い表現に触れる機会となった。扱う素材が読み物だとはいっても、読解技能の向上それ自体を目指すわけではない。内容に関連した発話活動などを通じて、既習事項を総ざらいし日本語の知識をより確実なものにするとともに、上級日本語話者が知っておくべき事項の欠落箇所を補うなどした。

4 午後の必修科目 (Afternoon Session 総合運用 I ~ III)

午後の必修科目「総合運用」は主として、読解、聴解、発話などの技能面に焦点をあて、文字通り総合的な日本語運用力の向上を目指している。身近で日常的な話題から始まり (総合運用 I)、より広範な社会的話題へと発展し (総合運用 II)、さらに学習者の興味や関心に応じた話題の学習 (総合運用 III) へと進んだ。

4-1 総合運用 I (Applied Japanese Skills I)

既習の文法事項などを総合的に活用する機会を提供し運用力を高める訓

練を積んだ。「経験談」「新聞入門」「ニュース入門」「新聞ニュース」というユニットからなり、自然な話し方に慣れるとともに、日本事情や時事的話題に関する語彙・表現の習得をねらいとする。2006-07年度は、1学期の第3週から第8週まで合計19日間行った。

4-2 総合運用Ⅱ (Applied Japanese Skills Ⅱ)

一般的な社会問題をめぐる生教材つまり読物と関連ビデオ（たとえば報道番組）などを読解・聴解し、話し合いを重ねることによって、類似した一般的な話題についても日本人と話し合える能力を獲得させる。この総合運用Ⅱでは、話題シラバスのモジュール型教材群「ものづくり」「文化の発信」「外国人と国籍」「地球環境」「働く女性」「教育制度」「差別と人権」「若者たち」のなかから学生の興味や関心あるいは必要性に応じて教材を選び、各クラスの理解度に合わせて授業進度を調整した。

2006-07年度の授業日数は、2学期の第10週から第16週まで25日間であった。

4-3 総合運用Ⅲ (Applied Japanese Skills Ⅲ)

「現代史」「大衆文化」「ビジネス・社会」の3コースから学生は各自の専門や興味に応じて1コースを選択した。各コースとも、読物を理解したりビデオを視聴したり、さらにその話題について討論をするなどの諸活動が盛り込まれている。2006-07年度は、3学期の第20週から第26週まで合計25日間行った。

4-3-1 現代史 (Modern History)

ムービーフィルムが残されている1900年前後からの日本の歴史を、特に戦後を中心にビデオと読み物で概観した。「戦前の日本 1900-45」「敗戦と復興 1945-55」「高度成長 1955-70」「現代の日本 1970-95」などの話題を取り上げた。

4-3-2 大衆文化 (Popular Culture)

広い意味での日本の“大衆文化”に関して日本人と話せるようになることを目標とした。「CM」「映画」「漫画」「文化政策」「伝統文化・古典芸能」などの話題を取り上げた。

4-3-3 ビジネス・社会 (Business/Modern Society)

バブル経済の前後における企業や政府、さらに社会や人々の暮らしの変化を、戦後史にも触れながら追っていった。「バブルの前と後」「創業者」「通産省と大蔵省」「平成不況」「雇用制度」「系列」「マネーゲーム」などの話題を取り上げた。

5 後期の選択科目 (Second Half of Program, Elective Courses)

分野・技能別の各種コースを開設し、学生は各自の専門や、必要とする技能に応じてコースを選択した。選択A（週2回の必修選択）、選択B（週1回の必修選択）、選択C（週1回の自由選択）の3種類を開設した。

5-1 選択A (Elective Course A)

3～4学期の午前週2回（月曜と木曜）各学生は、自己の専門領域に関連するコースを1つ選び、将来の学術研究や専門実務に資する能力の育成に取り組んだ。6種の選択コース「文化人類学」「政治経済」「美術史」「文学」「歴史」「法律」の具体的な内容については、本紀要■～■頁の「■■■■■■■■」に各担当教員の報告があるので詳細はそちらに譲る。

5-2 選択B (Elective Course B)

選択Bでは日本語力の増強あるいは周辺分野の指導をした。2006-07年度は、3学期（第20～27週）に「スピーキングI」「リーディングI」「リ

スニングⅠ」「ビジネス日本語」の4種を開講し、4学期（第30～38週）には「スピーキングⅡ」「リーディングⅡ」「リスニングⅡ」「ライティング」「現代小説」の5種を開講した。

5-2-1 スピーキング (Speaking)

発話力伸張の訓練を行った。具体的な教室作業は学生の日本語習熟度や要望によりクラスごとに異なるが、次のような練習（のうちいくつか）に取り組んだ。(ア)あらたまった状況、例えば大学院での演習場面を想定し、発表、司会、討論をする。その際、発表者は要旨と論点を事前に準備し当日資料を配付する。(イ)クラス外で日本人にインタビューした内容を授業で報告する。(ウ)1分間スピーチつまり要点を簡潔にまとめて話す。

5-2-2 リーディング (Reading)

3学期は「日本人論」に関する評論文を素材として、論旨の展開を中心に精読したのち内容について議論した。4学期は青木保『日本文化論の変容』を素材に読解と議論を進めた。「リーディング」の授業は、読解技能の伸張と、論旨に関する意見交換という2つの要素からなるが、両者の均衡あるいは重み付けをどうするかが課題として浮上した。

5-2-3 リスニング (Listening)

テレビ番組、例えばニュースやニュース解説、教養番組などを素材にして、聞き取りの訓練を積み重ねた。昨年度までは初見の素材を授業で集中して聞き取る練習形態をとったが、本年度は番組の録画・編集から学生への予習素材配布までデジタル化することにより、予習段階で精聴練習を課すことが可能となった。

5-2-4 ライティング (Writing)

随筆から小論文まで、目的に合った幅広い文章表現力の習得を目的とし

た。毎週、宿題として各種の文章を書き、授業ではそれを全員で検討・批判しあい、日本語らしい文章の書き方と推敲の技術について考察した。

5-2-5 ビジネス日本語 (Business Japanese)

学生から就職活動をへて新社会人に移行する過程で遭遇する状況を設定し、役割練習を積み重ねながら発話力の伸張を図った。またビジネス場面で求められる予備知識の提供や、実務文書の読解技能伸張も図った。さらに希望者には課外授業として、就職面接の個別指導も行った（5-3-4「ビジネス」参照）。

5-2-6 現代小説 (Contemporary Novel)

現在よく読まれている作家の短編小説を毎週1作品ずつ取り上げた。授業では予習を踏まえて学生間の議論を促し、作品の「読み」を相互に深めあった。教材として、村上春樹、宮部みゆき、村上龍、川上弘美、綿谷りさ、向田邦子、筒井康隆、などの短編を扱った。

5-3 選択C (Elective Course C)

自由選択コースとして「文語文法」「書道」「古筆」「ビジネス」の4種を開設した。「書道」のみ1学期から年間を通して実技指導を行い、ほかの3コースは後期から開始し講義形式を中心に、各分野の外部専門家が週1回指導した。4コースとも後期の授業は、3学期は放課後、4学期は昼の時間帯を利用した。

5-3-1 文語文法 (Classical Japanese Grammar)

文語文法の基礎から指導し、古典の読解へと進んだ。3学期の授業は毎週木曜15時15分～16時45分であったが、4学期は同13時15分～14時45分に時間を変更した（両学期とも90分間授業）。指導には、国際基督教大学講師の金山泰子が当たった。

5-3-2 書道 (Calligraphy)

書道の心得や筆の運び方などの基本から開始し、最終的には自作の落款付き作品を仕上げるまでに至り、掛け軸に表装した作品は卒業発表会場に展示した。1～3学期は毎週火曜 15 時 15 分～16 時 45 分に開講し、4学期は毎週火曜 13 時 00 分～15 時 00 分に開講日時を変更した。講師は書家の小林絃子が担当した。

5-3-3 古筆 (Classical Handwriting)

手書きの古典文献を理解するのに欠かせない古筆の読解練習を段階的に進めた。授業は、上記の書道と同じ書家の小林絃子が指導にあたり、書道クラス終了後の 60 分間ひと月に 3～4 回、3 学期は火曜 16 時 45 分～17 時 45 分、4 学期は火曜 15 時 00 分～16 時 00 分であった。

5-3-4 ビジネス (Business)

「日本の産業と金融」を主題に、新聞や雑誌の記事を素材として、ビジネス界の実情にも触れながら、日本経済の現在に至る経緯と今後の展望と課題について講義した。3 学期の授業時間は毎週木曜 15 時 15 分～16 時 15 分、4 学期は同 12 時 15 分～13 時 15 分であった。講師は浜銀総合研究所顧問の湧井敏雄が担当した。なお選択 B 「ビジネス日本語」と連携する形で、就職面接の個別指導も実施した (5-2-5 「ビジネス日本語」参照)。

5-4 プロジェクトワークと卒業発表 (Project Work and Final Presentation)

プロジェクトワークでは、各学生が自己の専門や興味ある分野の主題を選び、それに比較的詳しい教員との一対一の指導形態のもと、実地の調査研究や文献の読解などを行った。

2006-07 年度は、第 27 週および第 30 週から第 38 週までを、この活動の正規の授業期間とし、第 39 週を予備週にあてた。予備の授業日まで活用

した学生は合計 10 回の指導を受けることになった。

卒業発表会は、10 か月間にわたる学習を締めくくる催しである。各学生は、来賓と全教職員学生の前で、質疑応答を含め 1 人 15 分の持ち時間内で、やや改まった形式の発表をした。

卒業発表の題目一覧を下に示す（学生名簿順）。プロジェクトワークの成果を卒業発表会で披露した学生が多かったが、プロジェクト以外の発表も 4 件あった。その 4 件については、下記一覧の発表題目の下にプロジェクトワークの内容を「pw」として示した。

なお当センターのホームページでは 2006-07 年度も含め過去の卒業発表の要旨を公開してしてるので興味のある方はぜひ参照されたい。URL は http://www.iucjapan.org/presentations_j.html である。

卒業発表の題目（学生名簿順、pw はプロジェクトワークの内容）

禅による「悟り」：黙庵の「四睡図」における三幅対の崩壊

（pw 室町時代を中心とした美術とくに水墨画の研究）

インド人向け日本語教育

ICT による国際開発協力：JICA の遠隔教育への取り組みを事例として

なぜ日本アニメは外国人を惹きつけるのか

性非行少年の心理

「Sambo」は「サンボ」なのか：日本におけるちびくろサンボ像

出産

ライブドア事件：その会計処理

特許侵害における賠償金算定はなぜ必要か

日本での英語教育

メタポリズム：60 年代日本前衛建築

日本における NPO の誕生と発展

天、地とその他の世界：古事記と日本の古代世界像

平安中期における安部清明と岡野玲子版『陰陽師』

雅楽と現代の音楽

日本とアメリカの対中姿勢

言葉と意味の関係

(pw 古代チベットに関する文献の読解)

アーカイブを越える記憶：視覚的資料に関する過去の利用

新生銀行の3つの戦略分野

前近代における「女性の力」の操作としてのシャーマニズム

横浜中華街と神戸南京町の歴史

九鬼周造と「偶然」を哲学する

戦前の大連における阿片貿易で苦力が果たした役割

日の丸のポートレート：国家と戦後の美術

「平家物語」の諸本における敦盛説話

現世利益と悟りの追求：求聞持法の解釈

大戦中日系人収容者の川柳：サンタフェ高原吟社（1943-1945）

日本の会計制度に見る「なれ合い」: カネボウ粉飾決算事件を例に

政治で成長し資本主義で一人歩きをはじめたヤクザ

茶道と柔道の思想の比較: 「一期一会」と「自他共栄」

日本、中国、アメリカ（デラウェア州）の法人（会社）の形態の比較

(pw 三角合併を中心としたM&A、日米中の会社制度の違い)

愛の鞭：教育や躰手段としての体罰などに関する意見

言語変化に対する日本人の意識調査

天ぷら油は地球環境を救うのか？ バイオ燃料実用化の取り組みと課題

スタジオジブリのアニメ映画の中における自然のイメージ

日本における蚕種改良

源氏物語：絵とテキストを心的遠近法で読み解く

明治女学生の組織と団体

現代日本の若者の性行動：十代の性行動の現状と社会の認識

モテオヤジの作られ方：雑誌が提供するライフスタイルと消費の関係

IT 戦略：ユビキタスネットワーク社会へ

日本人とご利益信仰

(pw 寺院での女性の役割、女性住職と寺庭婦人)

現代日本文学に描かれた女性の病気

日本のサーフィン発祥地「湘南」

坂本龍馬：人間関係の考察

マイクロファイナンス：その可能性との日本の役割

できごととしての「転向」と歴史性の欠如

古代日本と中国とローマの駅制の比較

沖縄返還運動に於ける「沖縄ナショナリズム」とは何か

6 通年で実施した学習指導と行事など

6-1 アドバイザー制と評価 (Advisory System and Evaluation)

学生 1 人に専任教員 1 名がアドバイザーとしてつき、年間を通して学習上および生活上の助言・指導をした。2006-07 年度度は学生数が 49 名であったので、9 名の各専任教員の受け持ち学生は 5～6 名となった。

定期的な個人面談として、入学直後に 2 回そして各学期末に 4 回、合計 6 回の面談を年間の日程に組み込んだ。9 月初めの面談は診断的な評価であり、入学直後に実施した筆記試験（テープによる聴解試験を含む）と発話試験の結果を踏まえ 40 週にわたる学習の指針を示した。

1～3 学期末の個人面談は形成的な評価である。学生が履修したクラスを担当する教員の評価および学習上の問題点をまとめて、学生にフィードバックした。

各クラスでは、試験または試験に代わる小規模な発表、日々の小テストなどによって、学生の到達度・伸び具合を把握した。これらのテスト結果や、授業を担当する教員が日頃の観察から得た情報を、教員間で共有しあい、その後の指導に還元した。

4 学期末つまり年度末の個人面談は総括的な評価となる。年間コース終了直前に、入学時と同様の筆記試験・発話試験を実施し学習成果の客観的把握に役立てた。

アドバイザーは、担当学生の漢字プログラム（次節参照）の進捗状況を確認・促進する目的で週 1 回程度、漢字の読み方・発音指導などを行った。

6-2 漢字プログラム（スキップSKIP: Special Kanji Intensive Program）

常用漢字習得のためのプログラムである。自学用教材として当センター編集発行の市販教材 *Kanji in Context*（ジャパントイムズ社刊）を用いた。漢字を単独で取り上げるのではなく、熟語、例文と共に学習する。学生は、ワークブックおよびコンピュータで独習し、翌朝クイズを受け、教材助手が採点するという形で、それぞれの進捗で学習が継続できる。卒業時まで 1947 字（常用漢字＋2 字）が習得できる標準日程を組み、各教室には「今週の漢字」を掲示し学習促進の一助とした。

6-3 講演会・行事など

平日の授業時間帯に全学生を対象とする講演会を 4 回、校外学習を 3 回開催した。また、選択必修コースの授業の一環としてコースごとに実地見学におもむいたり、毎週金曜の放課後に映画を上映するなど、様々な学習機会を設けた。本年度の講演会と諸行事は下記の通りである。

なお下の一覧には、本センターの主催行事と、相手方の団体との共催行事、あるいは先方から招待を受け本センターが仲介した行事などを記載した。例年、学生が様々な行事や勉強会を催し、親睦を深め豊かな学習環境を醸成している。例えば 2006-07 年度も、古典愛読会（前期週 1 回）、感謝祭パーティー（11/24 金）、漢字クイズ王選手権（2/16 金）などが企画運営されたが、こうした学生の自主的な行事は一覧から省いた。

6-3-1 講演会（Lectures）

2006年10月20日(金) 横浜港の歴史と姉妹港

山梨真奈美・山田菜美子、横浜市港湾局振興事業課

11月16日(木) 日本の家族：そのイメージと実際

小玉亮子、横浜市立大学国際総合科学部教授

2007年 1月26日(金) 最初の日本人女性留学生：大山捨松の生涯

久野明子、日米協会理事

4月24日(火) 村上春樹と私

ジェイ・ルービン、元ハーバード大学教授

6-3-2 行事 (Other Educational Opportunities; field trips, site visits, outings, etc.)

2006年

9月 8日(金)入学祝賀会、横浜国際協力センター共用会議室にて

9月14日(木)防災説明会、避難訓練

9月29日(金)横浜の日 (横浜市内における班ごとの校外学習)

横浜自然観察の森、三溪園、横浜マリタイムミュージアム

横浜開港資料館、シルク博物館など

10月 1日(日)能鑑賞 (金春会定期能①) 国立能楽堂にて、希望者招待

10月 6日(金)映画「Always三丁目の夕日」鑑賞会、希望者対象

これ以降、毎週金曜日の放課後に映画会を実施

11月 4日(土)横浜市立大学「浜大祭」参加、学生との交流会、希望者対象

11月12日(日)能鑑賞 (金春会定期能②) 国立能楽堂にて、希望者招待

11月17日(金)説明会「エコシステモロジー(里山保全活動)」希望者対象

卒業生アダム・ロベル、武蔵工業大学大学院生

11月18日(土)横浜かもんやま能、横浜能楽堂にて、希望者招待

11月30日(木)説明会「日本における就職活動の実態」希望者対象

卒業生カール・パイザー、情報テクノロジー(株)販売主任

12月 6日(水)文楽鑑賞教室、国立劇場にて、希望者招待

12月13日(水)東京大学史料編纂所見学、希望者対象

12月15日(金)年末パーティー、横浜国際協力センター共用会議室にて

12月19日(火)神奈川大学日本語教員養成課程履修学生との談話交流会

2007年

1月20～21日(土～日)下田市主催「異文化体験プログラム」希望者招待

1月21日(日)能鑑賞(金春会定期能③)国立能楽堂にて、希望者招待

2月 1日(木)専門分野別校外学習(選択Aコースごとの実地見学会)

横浜市中心図書館、横浜地方裁判所、国会議事堂

川崎大師、太田美術館など

2月17日(土)大相撲「尾車部屋」朝稽古見学、希望者対象

2月20日(火)大衆文化コース 講演会「雅楽への招待」石川高 雅楽演奏家

3月30日(金)お花見、新港パークにて、希望者対象

4月 6日(金)東京の日(横浜発～東京都内におけるバス移動教室)

両国：江戸東京博物館 ←午前 ↓午後3つから1つ選択

上野：東京国立博物館、国立科学博物館、上野動物園

4月17日(火)盲導犬育成慈善音楽会、みなとみらいホール、希望者対象

5月11日(金)スピーキングA組「女たちの戦争と平和資料館」見学

5月17日(木)法律コース 最高裁判所、国会議事堂、皇居を見学

5月19日～20日(土～日)下田市主催「黒船祭り」希望者招待

5月21日(月)政治経済コース 青山学院大学大学院生との談話交流会

6月5日～6日(火～水)卒業発表会、みなとみらい21まちづくりプラザにて

6月 8日(金)卒業式、卒業祝賀会、横浜国際協力センター共用会議室

7 おわりに

本センターは 2007 年 3 月上旬から 4 月上旬までの約 1 か月間、日本語教育を専攻する横浜国立大学の学生 1 名(4 月の新年度から大学院生)を研修生として受け入れた。この実質 100 時間にわたる研修制度は、横浜市国際交流協会が市内の大学と国際機関とを橋渡しする形で 2006 年より始

めたものである。

研修生は、教材作成の補助業務や授業見学などをしながら、自由会話の個人指導も担当した。この自由会話は、ふだん日本人との会話機会が少ない、口の重い学生のための特別授業である。この種の個人指導では、打ち解けて話ができる、和やかな雰囲気が欠かせない。老練の熟達した教師よりも、むしろ学生と年齢の近い研修生のほうが、軽め的话题を持ち出しやすく有利な面がある。

横浜は、東京都心に近く便利であると同時に、東京とは異なり開港以来の独特の気風を感じさせる地域でもある。日本語を学ぶには恵まれた環境といえよう。上記の研修制度は、地域の人的資源が教育環境として活かされた一事例であり、このような地域との交流は双方に得るものが大きく互恵的な活動となる。

われわれ教職員一同は今後さらに、地の利を生かした教育環境づくりを目指したいと考えている。

(まつもと たかし／アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

言語課程主任)